



第11号：平成27年3月2日 尾形光琳 —— 1

琳派とは、光琳の「琳」から名付けられた名称、今日では一般によく知られているが、彼の生存中は「光琳流・尾形流」などと云われ、「琳派」とは呼ばれていない。さらに宗達や光悦を琳派の中に入れることすらもなかった。呉服商・雁金屋の次男坊・光琳は気楽な生活をしていたが、家産が傾き生きるために四十代になって本格的な絵師になった人で、直接指導を受けた絵の師匠はいない。姻戚関係が考えられる俵屋宗達がお手本になったのであって、狩野派の絵師のような専門絵師とは異なる。子供の頃に習い覚えた絵を描く藝が身を助けたと云える。しかし、人気はあった。当時の人々の心を惹きつける魅力のある作品を数多く残しており、光琳の絵を所有することが町衆たちの自慢であったことは有名である。

織物や染物の意匠に「光琳波」や「光琳梅」などと呼ばれる文様を取り込まれ光琳文様として流行した。焼物や塗物にも光琳風の図柄が用いられ、日常生活の中に光琳は生き残っている。現代人は「藝術」という言葉の魔力に執りつかれ、身の回りにある普通のモノとは異なるモノを崇拝するようになってしまっているが、光琳が望んだモノは特別な「藝術」ではなく、日常生活の中に生かされる美しいモノであった、と云えるのではないか。京都の町中にはそれが今日でも何気なく生き続けている。